

識別番号	P 1	2006 年度完了学内共同研究	
研究課題	明治期のアカデミズムにおける「東洋文化」意識の形成とその意義		
研究代表者	大島 晃 (文学部国文学科)		
共同研究者	文学部国文学科	教授	大島 晃
	文学部哲学科	教授	渡部 清
	文学部史学科	教授	山内弘一
	文学部国文学科	教授	松岡洸司
	文学部国文学科	准教授	長尾直茂 (2005～6 年度)
	総合人間科学部教育学科	教授	湯川嘉津美
	文学部国文学科	嘱託講師	白石真子 (2004 年度)
	文学部非常勤講師 (協力者)		瀧 康秀 (2005～6 年度)

Summary The concept of “東洋文化 (Toyo Bunka)” is not strange to us. As a general, obvious concept, the academic field would also hardly feel something wrong about it. However, in order to bring up “東洋文化” as an obvious concept, it is essential to verify its contents and characteristics even today.

The purpose of this joint study, as the basic study for reexamining the concept of “東洋文化”, is to show the academic state through seeing the creation of the sense of “東洋文化” in the Meiji era, Japan. Researchers of this joint study aim to examine the role of the sense of “東洋文化”, its state and significance, in terms of philosophy, religion, ethics, history, literature, languages, and education.

This joint study is not conducted by the uniform approach, but from the viewpoint of each researcher's field and subject of study; thus, it attempts to examine how to focus this theme originally. Therefore, this study includes not only the attempt to focus on literally “東洋文化” or “東洋”, but also the one to reflect the theme by discussing how to receive the models of “西洋文化 (Seiyo Bunka)” or “西洋”. Moreover, this study attempts to view from the academic development from the Edo to the Meiji era, while starting typical case studies underlying “東洋文化”.

The outline of this study was reported. Regarding the establishment of the common awareness of problems and directions, which organize the core of this study, it can be said that this study came to the starting point. In consideration of its huge theme and significance, this study is expected to continue for the development in the future.

〈研究の目的と背景〉

「東洋文化」の観念は、我々にとって奇異なものではない。一般化した自明の観念として、学術の世界においてもこれに違和感を抱くことはほとんど無いだろう。しかしながら、

「東洋文化」を自明の観念として掲げるには、その内容・性格を検証することが必要不可欠である。現在の中国において、「東洋」という現代漢語は、日本を意味し、「東洋人」「東洋貨」とは日本を指して言う。我が国において、世界を、あるいは国際化を意識する「東洋文化」が中国において共有化できる観念となっていない状況を容易に知り得る。

一方において、アジア・東アジアの文化的交流を歴史的に再検証し、あらためて「アジア」「東アジア」を標榜する取組みが顕著である。中国はもとより、台湾、韓国が国家的な施策として、高度で総合的な学術研究プロジェクトを立ち上げてきている。

今般の共同研究は、現在の「東洋文化」の観念を再検証するための基盤研究として、我が国の明治期における「東洋文化」意識の形成をめぐって、とくにアカデミズムに見る諸相を浮かび上がらせることを目指している。とくに、哲学・宗教・倫理・文学・語学・教育学を中心に、「東洋文化」という意識がどのような役割を果たしたのか、その有り様と意義を検証したい。

〈研究の方法〉

共同研究構成員は、画一的なアプローチによるのではなく、各自の研究分野・対象において、まずは原初的にこの問題をいかに照射するかを試みてきた。従って、文字通り直接的に「東洋文化」「東洋」に焦点を当てる取組みもあれば、逆に「西洋文化」「西洋」のモデルの受容から反照射する試みもある。また、江戸期から明治期における学術の展開から俯瞰するための工夫を試みる一方、「東洋文化」の底流に存する、典型的な事例研究にも着手した。

本研究の遂行に当っては、三年間で24回の研究会を開催し、専ら共同研究班構成員が発題者となって報告を行い、それをめぐり参加者が質疑を行い、研究課題の討議を行った。これを通じて、共同研究の基盤作りを図るとともに、各自の研究の取組みの方向をより鮮明にすることに努めて来た。

〈研究の内容と要点〉

研究の中核を構成する共通の問題意識、方向性が出来てきたという意味では、本研究は緒に就いたということになる。研究のテーマの大きさと今日的意義を考えれば、今後これを発展的に継続させることを期待して、現段階での研究の項目をとりまとめ、報告とする。

1. 「東洋」——その地理的側面、文化的側面そして教学・倫理的側面

文学部国文学科教授 大島 晃

(1) 「東洋」概念の再検証の出発点について

- 1) 江戸期に醸成された「東洋」概念が明治期の「東洋」概念の変容に果たした役割
- 2) 「哲学」の確立と「東洋」の伝統思想との関わり
- 3) 「東洋史」の確立と「東洋文化」観をめぐる評価
- 4) 「東洋哲学」の確立と「東洋道徳」の提唱

(2) 教学の提唱と「東洋道徳」について

- 1) 東京大学文学部の歩みと「東洋学」
- 2) 元田永孚の教学の提唱
- 3) 井上哲次郎と『教育勅語』
- 4) 三島毅の「五大州不出仁義範囲の説」

2. 明治期における哲学思想の形成と仏教・儒教

文学部哲学科教授 渡部 清

- (1) 東京大学「哲学科」の設立
- (2) 「洋学としての哲学」と「東洋文化」への反省と再検討
- (3) 『大乘起信論』と近代日本の哲学思想
- (4) 井上哲次郎・三宅雪嶺・井上円了・清澤満之の哲学思想の源泉
- (5) 西田幾多郎の哲学思想の源泉
- (6) 近代日本の「独自の」思想と仏教と儒教

3. 「東洋文化」という概念と東洋史家の「東洋文化」観 文学部史学科教授 山内 弘一

- (1) 「東洋文化」という概念
 - 1) 「東洋」
 - 2) 「文化」
- (2) 中華文明と「礼」とくに祭祀について
 - 1) 文・文明と礼
 - 2) 韓国における祖先祭祀
 - 3) 『文公家禮』と韓国の祭祀
- (3) 内藤湖南と津田左右吉の「東洋文化」観

4. 「東洋」という概念の成立 文学部国文学科教授 松岡 洸司

- (1) ヨーロッパにおける「西洋」と「東洋」
- (2) 江戸期における「東洋文化」観念の醸成——その検証の課題

5. 「支那学」の発達、中国・朝鮮・日本における三国志文化交流

文学部国文学科准教授 長尾 直茂

- (1) 倉石武四郎講義『本邦における支那学の発達』をめぐる研究と調査
- (2) 朝鮮版中国小説の日本流入をめぐる研究と調査
 - 1) 東アジアの漢字文化圏における中国文学の拡がり
 - 2) 書籍流通の経路と東アジアの文学・出版をめぐるネットワーク

6. 明治期における西洋教育システムの導入とその特質

総合人間科学部教育学科教授 湯川嘉津美

- (1) 学制後期の大学区教育会議に関する研究 ——第一大学区教育会議日誌の分析を中心に
- (2) 1884年の学制改革案
- (3) 中村五六のフレーベル理解 ——明治期におけるフレーベル受容の一断面

7. 明治期漢文教育における文章軌範——齋藤拙堂と『史記』 文学部非常勤講師 瀧 康秀

- (1) 齋藤拙堂の文章と明治期漢文教育
- (2) 齋藤拙堂の文章と『史記』